

さいごの捕鯨船

土井全二郎

さいごの捕鯨船

土井全二郎



ちくまプリマーブックス 3

筑摩書房

665/ さいごの^{ほげいせん}捕鯨船

219pp/19cm/B6 判



1987年2月20日 第1刷発行

著者 土井全二郎

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

TEL 03-291-7651(営業)

294-6711(編集)

定価950円 振替 東京 6-4123

装幀者 高麗隆彦

三松堂印刷 積信堂製本

© 1987 Z. Doi

Printed in Japan

ISBN 4-480-04103-6 C8062

乱丁、落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

さいごの捕鯨船●もくじ

はじめに 7

捕鯨船に乗る

操業はじめ 11 潮吹きあがる 14 命中！ 18

命中率八〇パーセント 22 流氷帯ゆるむ 24

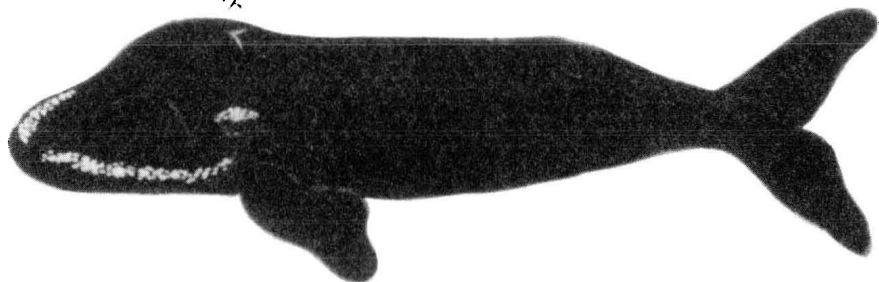
氷山帯を行く 26 シケのなかで 29 探鯨機 32

全速力 35 爆発モリ 38 平頭モリ 41 てっぽ

うさん 43 ハダカのつきあい 46 船の食事 49

イヌ樺操業 52 近代捕鯨のはじまり 56 シャ

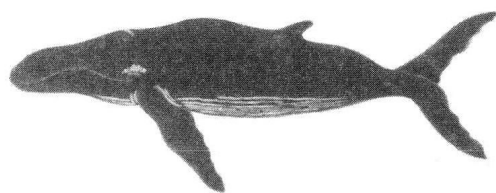
ウ
ズ



チの群れ 59 真一文字 61 捕鯨船乗り 65 母
船に移る 67

クジラの不思議

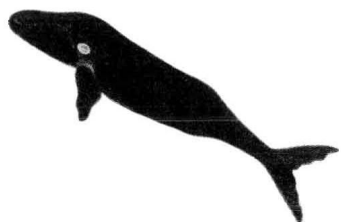
スリップウェー 75 解体はじまる 78 白骨解
体 81 六枚おろし 83 白夜の世界 86 クジラ
の体重 88 回遊のしくみ 92 クジラのベ！コ
ン 95 巨大な胃ぶくろ 97 五〇〇枚のヒゲ 100
赤ちゃんクジラ 103 クジラのおっぱい 106 四
つ子見つかる 109 耳アカ調べ 113 クジラは近
視 115 短距離競走 118 クジラのシラミ 122 ヘ
ンな小腸 125 病気あれこれ 128 五本のアゴヒ



ゲ 131 ムカシクジラ 134 クジラのうしろ足 137
世界的な発見 140 白鯨はいる 143

南氷洋に生きる

しずまぬ太陽 149 着氷多し 151 前線かけぬけ
る 156 神だのみ 159 食事が楽しみ 163 内地か
らの便り 166 平均四六歳 168 クジラはふえて
いる 170 鯨捕りは天職 172 先祖の血 176 おバ
アちゃん船 179 捕獲禁止のクジラ 182 油も肉
も 184 むかしから海の幸 186 クジラ供養 189
氷の海の正月 192 国際鯨類調査 194 コック長
なやむ 196 オーロラを見る 200 クジラ座 203

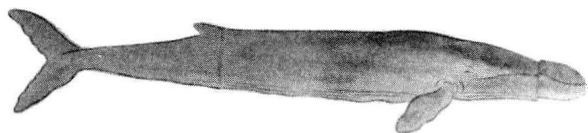


212 九〇頭の群れ 205 最後の一頭 210 別れの汽笛^{きてき}

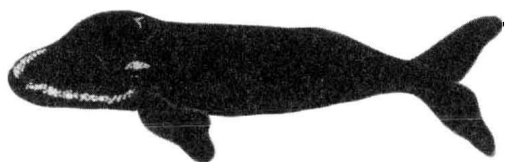
あとがき 215

写真 土井全二郎

もくじ・扉^{とびら} 鯨絵巻^{くじょうまき} (国立史料館所蔵)



さいごの捕鯨船



はじめに

鯨捕りの男たちの物語が聞かれなくなりました。

長い歴史と伝統をもつ日本の南氷洋捕鯨も、昭和六一年一〇月末に出漁していった捕鯨母船一隻、捕鯨船（キャッチャーボート）四隻からなる船団が、最後の捕鯨船団となってしまいました。

昭和六二年三月かぎりまで、南氷洋での捕鯨が全面的に禁止となったからです（沿岸捕鯨は六三年三月まで）。

わが国の南氷洋捕鯨は、かつては七隻の捕鯨母船、さらに百隻近い捕鯨船、鯨肉運搬船が出るなど、それはそれはさかんなものでした。それが、だんだん数がすくなくなっていき、昭和五十年代にはいると、捕鯨母船もわずか一隻というさびしいものとなりました。

どうしてこんなふうに変わってしまったのでしょうか。

昭和四十年代のおわりころから、「クジラはへってきている」「クジラがかわいそう」、そん

な捕鯨^{ほげい}反対の聲が國際的に高まってきました。ちょうど公害問題などで、わたしたちの身のまわりの自然環境^{かんきよう}がおかしくなってきた、といわれはじめたころです。捕鯨問題も「自然を守れ。野生動物をむやみに殺すな」という主張のなかで大きくクローズアップされたのでした。

それ以来、南氷洋での捕鯨は、捕獲^{ほかく}するクジラの種類やその数にも國際的なきびしい目がむけられるようになり、おしまいにはわずかに小型のミンククジラだけ、それもほんのすこししか捕獲してはいけないというふうになってしまったのです。

「クジラはほんとうにへっているのだろうか」「國際的に反対されるほど乱暴^{らんぼう}な捕鯨をしているのか」。これは、前から思っていたことで、いちどでいいから捕鯨船に乗って、そのじっさいのありさまを自分の目でたしかめてみたいと考えていました。

その願いが実現するまでには、すこし時間がかかってしまい、ようやく南氷洋に出かけられたのは、昭和五九年秋から翌^{よく}六〇年春にかけてでした。南氷洋捕鯨がダメになる直前のことだったのは、皮肉といえたいへん皮肉な話です。

しかし、かえってよかったのは、「捕鯨がつづけられるか」「禁止になってしまふのか」、ちやうどそういうぎりぎりの時期にあたっていたことです。

このため、鯨捕り^{くじらと}の男たちからは、生^{なま}の声を聞くことができたように思います。ほんとうの

心からのうったえ、なやみが聞かれ、あるいは「いまがんばらなくては」という力いっぱい働きの見られたように思います。

それからあと、昭和六一年一〇月に出漁した船団もふくめて、二回の南氷洋捕鯨^{ほげい}がありました。が、これらはもう「捕鯨禁止」がきまったのちの操業でしたので、鯨捕りの男たちの元気なかけ声は、もう聞かれませんでした。

そういう意味で、この航海が日本の長い南氷洋の歴史をしめくくるにふさわしい「最後の捕鯨船」だった、といまでもそう考えています。

南氷洋への航海は、行き帰りもふくめて一六三日間という大航海でした。とちゅう、どこの港にも寄らない、ただひたすら海ばかりという生活がつづきました。

船橋^{せんきょう}で、甲板^{かんぱん}で、船室で、鯨捕りの男たちはたくさん話をしてくれました。おもしろい話、あつとおどろくような話。お酒を飲んでは、子どものこと、ふるさとの話に泣く人たちでした。しかし、捕鯨の仕事には勇かんにとりくむ人たちばかりでした。

この本は、氷の海とたたかい、あの巨大なクジラとたたかった、そうした海の男たちの最後の物語です。

捕鯨船ほげいせんに乗る

操業はじめ

捕鯨船（キャッチャーボート）の朝は早い。

五時半には朝食だ。食卓しょくたくではまず天気の話になる。風むきは、風の強さは、気温はどうか。天気図が広げられる。当直の航海士が気象データを報告する。みな真剣しんけんな表情だった。天候しだいで、その日の好不漁がはつきりわかるのである。

六時一〇分前、全員が配置につく。クジラをさがすための見張りはトップマストに二人、船橋きょうの上にあるアッパーブリッジに三人、さらに指揮所しきしよに三人。この指揮所は船橋の前にあって、船の幹部である砲手ほうしゅ、船長、通信長の持ち場となっている。操業の中心であり、船の運航、母船との連絡れんらくにもあたる。

午前六時、母船の指令室から、無線を使つてのその日のあいさつと操業の指示がある。「さあ、今日もがんばつていきましょう」

捕鯨船はぜんぶで四隻。いま、母船からの指示により、それぞれ二マイル（三・七キロ）の間隔をとつていっせいに操業にとりかかった。速力一一ノット（時速二〇キロ）。

昭和五九年一二月はじめ――。外は明るかった。南氷洋は夏の真つ盛り。すでに白夜の世界となつている。深夜に数時間のヤミがしのびよってくるだけで、あとはまったくの昼の世界である。

しかし、なんという寒さであろうか。

すべての見張り場所は吹きさらしだ。操業中の捕鯨船では、エンジンを動かす機関室のほかはすべてこうした戸外作業となる。クジラを見つけ、追いかけて、捕鯨砲を撃ち、とれたクジラを船腹にしばりつけて母船まで運ぶ。こうした一連の捕鯨操業は、屋根つき、暖房つきの船内にはいつては仕事にならないのである。

アップーブリッジの指揮所に立つてみる。わずかにまわりに張りめぐらせてある側壁が胸までの風をさえぎってくれるのだが、顔面にはもろに風がぶつかってくる。

耳おおいのついた防寒ぼうしをかぶり、首のまわりをしっかりとマフラーで巻いていても、



きびしい寒さのなかで見張りが続く。高さ18メートルのマストは大ゆれにゆれる。

ずしんとくる寒さが全身に伝わってくる。双眼鏡そうがんきょうをもつ手が、そして指先が、二枚がさねの手ぶくろをしているのにもかかわらず、つめたさ、痛さをおりこして無感覚になってくる。

この朝、くもり。北北東の風七メートル。気温氷点下三度。これでも南氷洋ではおだやかなほうの天候ということだった。黒い海面には白い波頭がくだけていた。

第三日新丸船団——。

わが国でただひとつの捕鯨母船はげい、日本共同捕鯨会社所属の「第三日新丸」(二万三〇〇〇総トン)、それに四隻せきの捕鯨船からなる捕鯨船団は、いま、日本からはるか遠くはなれた南極大陸間近の南氷洋で操業を開始した。

潮吹きあがる

「三〇五度」「四マイル」

とつぜん、トップマストから緊張きんちやうした声が伝わってきた。トップマストは捕鯨船特有のもので、高さ一八メートルもある。そのてっぺんは乗組員が二人すわれるようになっていて、まわりをかこつてある。この船でもっとも高いところにある見張り場所だ。

いま、そのトップの見張りが、左舷前方さげん、七・五キロ先のところにクジラを発見したという